

たぐみ

Craftsmanship

特集 特別展「冬の蔵出し市」 第53号
 論考 日本と韓国・中国の真の融和について考える(一)

秋の二つの展覧会から

一、バーナード・リーチ展

バーナード・リーチは一八八七年(明治二〇)、香港で生まれ日本で幼時を過ごした。ロンドンの美術学校に学んだころラフカディオ・ハーン(小泉八雲)にあこがれ一九〇九年、来日した。そして上野の桜木町で銅版画の教室を開き、雑誌「白樺」の同人、武者小路実篤、志賀直哉、柳宗悦や高村光太郎、富本憲吉らと親交を結んだ。

その後富本とともに六世尾形乾山に楽焼を学び、陶芸を終生の仕事とするが、その時代の欧米列強やアジア諸国の紛争を目の当りにしただけに「東と西の融合」ということを念願とした。

さて、表題のリーチ展は、八月二九日から十一月一日まで、順次開催で高島屋東京店、横浜店、大阪店、京都各店の大催事場で開催された。今年は、生誕一二五周年ということで、朝日新聞社主催、アサヒビール大山崎山

荘美術館、日本民藝館の協力で行われ、見応えのある大展観であった。

今回の「リーチ展」の特色は、彼の初期の桜木町時代の楽焼の作品から、我孫子の柳邸内に築いた本窯の作品、そのあとの黒田清輝邸の東門窯の作品など彼の青年期の、のびやかな作品に心奪われるものがあった。

また大正時代中期からの英国セント・アイヴスや昭和になってたびたび来日したおりの、九州や、山陰、益子など民窯における作品など、多様なリーチ作品の全貌が楽しめるのである。それとともにリーチが、洋風の生活に合った食器、たとえば紅茶碗、ピアマグ、ピッチャーなどの形態、またスリップウエアアなどの上絵技法などを日本の民窯の工人に教えたこともどれほどの恩恵となったことか。

それだけに来観者の多くが作品の鑑賞とともに、リーチの生涯から何かを讀みとろうとし、会場を去りがたい、といっておられたという。(次頁へ)

二、用の美とこころ — 民藝展（承前）

高島屋各店で「リーチ展」に併催された「民藝展」も評判で、永年の愛好家の方だけでなく、はじめて「民藝」という言葉や品々を目にし、手に取った若者も多かったようだ。また会場での物を求める行為の真剣味に、感動したという声もあった。

この「民藝展」は高島屋の企画で、昭和九年一月、日本で初めて開催された民藝品の総合的な展覧、「現代日



バーナード・リーチ展会場

本民藝展覧会」（高島屋日本橋店）の再現を、という思いで七八年ぶりに準備され、「たくみ」も微力ながらも全力を挙げて協力してきた。因みに弊社

は昭和八年一二月の開業だが、高島屋日本橋店も同年の新装開店という。

第一回展は、民藝運動の調査、啓蒙を担う日本民藝協会の九年六月の発足と、前年末の「たくみ」の開店による販売部門の整備が前提となった。

そして九年一月に開催されたこの展覧会は柳、河井寛次郎、濱田庄司と、



用の美とこころ — 民藝展 — 会場

折柄来日中のリーチはじめ民藝協会幹部あげての全国行脚の集荷により、案内文によれば千五百余种、一万数千点の民藝品が出品されたという。

また今回、リーチ展出口に隣接したモデルルームは、昭和九年の展覧会の際、リーチによって考案設計された書齋を再現したもののだが、いかにも日本びいきのリーチらしい、和洋折衷の面白みを演出している。

高島屋が今回の「リーチ展」と「民藝展」で、新聞、マスメディアを活用してのPRは見事であった。とくに朝日新聞紙上に、第一回展の図録と、柳による解説文の結びを紹介したのは、作り手にとつて大きな励みになった。左記がそれである。

「…是等の品物を見て悦んでくれる人があるなら嬉しい。
進んで其れを生活に取り容れて使ってくれる人があるなら尚嬉しい。
併し其れよりも更に是等のものを通して、未来に正しい作物を産んでくれる人が出るなら、最大の感謝である…」

（志賀直邦）

根曲竹の籠

會田 秀明

竹の文化はアジア一円、インドまで続き、日本も縄文時代から一万年以上の歴史がある。

竹と笹は全国に生育しているが、真竹など良質な材料は関東から南の地方



根曲竹の製品
左から時計回りに石鹼籠、種洗い籠、物入れ、皿籠

が恵まれており、特に九州は竹製品の生産が盛んである。東北から北は竹の生産量が少なく、代わりに笹や、あけび、山葡萄、樹皮などが使われている。

青森県の日本海側は冬の寒さと降雪のため、竹の生育に向かず、笹の根曲竹を使って籠やざるを作ってきた。

根曲竹の和名は千島笹であるが、根元からななめに這い上がるので一般的には根曲竹と言われている。生育地はサハリン、千島から北海道と本州の日本海側の700m以上の山地で、島根県の大山が南限である。県内の平地に生えているのはほとんど信濃笹である。

根曲竹は高さが1.5〜3mで、中には4mに達するものもある。茎の直径は1〜2cmになり、日本の笹の中では最も大型で剛壮である。重いリングゴを入れる籠に使われたのも納得できる。

県内の竹製品の材料としては、真竹や孟宗竹が県南地方の太平洋側で少々栽培されているだけで、多くは県外か

ら購入している。雪の少ない太平洋側にはまず竹が生育し、八戸市や岩手県二戸地方で籠やざる、その他いろいろなものを作られている。

根曲竹は種洗い籠やリングゴの収穫に使う手籠、口付ざるなどが大量に作られた。しかしプラスチック製品が出回ると安価なため取って代わられた。リングゴ籠を作っていた人たちは技術を生かし、少しでも現代の生活に即した物になるように創意を重ねており、手提げ籠、椀籠、皿籠、脱衣籠、石鹼籠などが生み出されている。

多くは津軽地方の弘前市岩木地区で作られているが、最近ばかり手が高齢化し後継者が少なくなっているという。

根曲竹の籠やざるを見てみると、実にしつかりしていて、形が頼もしい。とくに強度においては他の竹や笹に勝っている。自然素材の持つ手触りの良さや温もりがあり、県外では根曲竹の製品が見直されている。

(筆者は青森県民藝協会会長・写真も)

たくみ特別展 「冬の蔵出し市」

会期 平成二十四年二月一日(土)～二〇日(月)

二月二日(日)、九日(日)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 二時から一九時まで(日曜、最終日は一七時半まで)



愛染明王梵字額 (芹沢銈介)



花鳥図 (李朝民画)



練上手盃 (上田恒次)



寿文鉄行灯 (芹沢銈介)

出品品目

- 陶 濱田庄司、島岡達三、船木研兒、上田恒次、佐久間藤太郎、金城次郎、西岡小十(唐津)、加藤孝造(志野)、伊万里染付、安南染付、瀬戸石皿など
- 布 きもの布地、絵紜端布、海外染織品など
- 木 信州運び盆、安南螺鈿箱、黒田辰秋門下拭漆額など
- 雑 吹硝子、型硝子の器、竹・いたや・山ぶどうの籠類、編み笠、土人形など
- 絵 李朝民画、小島憲次郎染絵額など
- 本 美術工芸関係図書
- 特別出品 芹沢銈介作品
愛染明王梵字額、寿文鉄行灯、どんきほうて、物偈文額ほか、型染絵、筆彩作品いろいろ



湯呑 (佐久間藤太郎)



絵本どんきほうて試作 (芹沢銈介)



絵唐津平向付 (西岡良弘)



絵本どんきほうて試作 (芹沢銈介)



唐津亀形箸置 (西岡小十)



西洋絵暦12ヶ月 (小島恵次郎)



絵唐津鉢 (西岡小十)



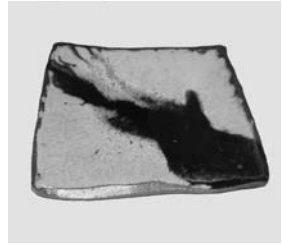
螺鈿箱2種 (安南)



五戸バオリ(津軽)



すかり(秩父)



朝鮮唐津四方皿(西岡良弘)



山葡萄とイタヤの籠(秋田)



びく(島根)



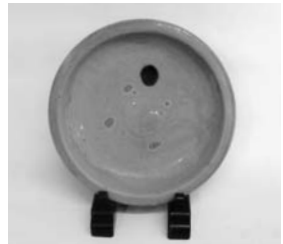
鳥の水呑(大谷)



なたざや(東北)



羽釜



石皿(瀬戸)



革張り椅子(メキシコ)



尺2寸すり鉢(母里)



湯たんぼ(檜岡)



ビアマグ (イラン)



アルパカ敷物 2種 (ペルー)



青首徳利 (笠間)、文字入徳利 (小石原)



こぎん刺し屏風



染付飯碗 2種 (伊万里)



白磁角皿 (上田恒次)



緑釉湯呑 (船木研兒)、押文白釉ピッチャー (同)



運び盆 (信州)

日本と韓国・中国との真の融和について考える(一)

志賀直邦

日本人がこの国を自ら「倭国」とよび、「邪馬台国」と記し、まほろばの「大和の国」と謡った古代から朝鮮半島とは近く親しい関係にあった。もとよりそれは東アジアの歴史が文字に刻まれるはるか以前から、もろもろの出土文物によって証明された事柄であった。

古事記、日本書紀をみても、飛鳥時代に来朝の朝鮮半島の使節には、通訳なしに話がつうじたという。また渡来系であることが知られる秦氏(河勝)や東漢(やまとのあや)氏(坂上田村麻呂)や蘇我氏(馬子、入鹿)などをはじめ、朝鮮半島の戦乱の中で、高句麗、新羅、百済から日本半島に永住の地を求めた人々の子孫は数限りない。

日本民族の起源については、明治時代から議論のあるところだが、とくに人類学の立場からコンピュータを駆使して人口動態を推計した小山修三民族博教授の研究によると、縄文後期の

日本列島の人口は十六万ほどだったが、晩期には寒冷化と食糧不足のため七万五千余に激減し、それが紀元七世紀には五百四十万に増加したという。

さらに、埴原和郎東大教授は、弥生時代の初めから百万人以上の大陸からの渡来がなければその数には達しないとする。そして七世紀に、近畿地方では渡来系九に対し、縄文直系は一の割合であり、関東地方では半々で、東北地方を北上するにつれて縄文の比率は多くなるという。

現代日本人には、北東アジア系の遺伝子が八〇%含まれているという尾本恵市東大教授の説もある。しかしこれは何も日本人に限ったことではない。

◇中国の民族問題について

中国では漢民族のほかに少数民族といわれる、人種、言語、風俗、宗教や生活習慣を異にする民族が公表五四、

実際には百以上あるという。かつて元(モンゴル)や清(満州族)に征服された経験をもつ中国の永い歴史の中で、混血も進みながら、なおかつ独自の民族性を保ち続ける民族がいまなおそれだけあるのである。

現代中国においては、少数民族の問題は複雑で、深刻な問題である。中国政府は毛沢東の時代から社会主義的平等を正義とし、固有の言語や宗教、習慣を抑圧し、同化を強制してきた。

今日では彼らの住む地域の資源や土地の利用権など複雑にからみ、チベットや新疆ウイグルなどの、かつてはロシアやイギリスと条約を結んだ独立国が抑圧され、開発を名目に漢民族の移住が促進され、いまではそれらの地域で漢民族の数が本来の民族の人口を越えたとすらいわれる。

さらに都会においては地方に原籍のある少数民族は、仕事、住居、教育に制限(差別)があるため、戸籍の民族欄に漢民族と記入する人も多いといふ。

しかしチベットや新疆ウイグルに見るように、彼らが断固として中国政府と闘うのは、民族の尊厳を守るためである。その尊厳とは何かといえば、昔から永く伝えられてきた民族、部族のアイデンティティ、つまり血族の歴史、固有の言語、祖先への祈りと信仰、そのなかで生まれた造形表現である。

中国の四千年の歴史の中で、民族の問題を考えるのは余りに紙数がない。だが、はつきりしていることは、中国に隣接し、あるいは海をへだてて昔から共生し、交流し、ときに争いのあった国や民族は今も何十百とあることである。ただそういった歴史をどう公正に記述し、人びとに教えていくか、これがまさに至難の業なのである。

◇韓国の国定歴史教科書の二つ

さて昭和二〇年（一九四五）、日本の敗戦によって国の独立を回復した韓国では、国の再興のためにも正しい歴史認識が最重要視された。

だが朝鮮近代史とくに日韓併合関係

史の先駆的研究者であった山辺健太郎によれば、日本の敗戦まで、朝鮮の小中学校では朝鮮史の授業はなく研究書もなかったという。もとより日本の統治下で、独立国としての韓国史を研究出版すれば発売禁止は確実であった。したがって山辺は「日韓併合小史」を執筆するに際し、正しい資料の蒐集に大変な苦勞をしたという。

ところで独立後の韓国では、国史の教育が国民学校五、六年から高校、大学までの必修科目となったのは一九七三年からであった。

いま私が手にしているのは一九九五年（金泳三大統領時代）に発行された国定国史教科書の日本語版「韓国の歴史」である。約五百ページにも及ぶ大冊に詳しく立ち入る余裕はないが、目次を追いながら記述の概要を見よう。

「倭」や「日本」に触れているのは、古代では「三国の成立と古代社会」、「古代の経済生活」、「古代文化の日本伝播」、の三項目である。

中世はなく、近世は「朝鮮初期の対

外関係」、「倭乱と胡乱」（日本では倭乱を文祿、慶長の役、という。胡乱は北方の女真族―後金―清国との争い）である。

近代では「朝鮮後期の対外関係」（一つは「徳川幕府との朝鮮通信使に関すること」。もう一つは「独島―日本という竹島と、鬱陵島の領有権は古代、三国時代以来韓国にある、という記述」）。

さらに日本の明治維新のころの一九世紀後半の、朝鮮の鎖国から開国への生みの苦しみの混乱期、そして日本人による貿易独占、土地略奪など。

そしてこのあと日韓併合（明治四三年・一九一〇）と、九年あとの（大正八年三月一日・一九一九）、高宗の葬儀を機に朝鮮全土で起きた「三・一独立運動と、その後の満州南部まで及ぶ義兵闘争などが詳しく記述されている。

「日帝の内鮮一体、日鮮同祖論、皇国臣民化のような荒唐無稽なスローガン」の下で、民族の言葉と歴史を学ぶことが禁じられ…、「またわが民族は戦

争に必要な食糧、物資を収奪され、青年は志願兵、あるいは徴兵制や徴用制によって強制動員され、女性までもが挺身隊という名目で連行され犠牲となったのである。」(「独立意識の成長と三・一運動」韓国国定教科書本文より)

右の文章も、両国の間でよく論じられる部分でもあるが、韓国の全ての若者が一度は高等学校で、この国定歴史教科書を学んでいるのだから、潜在意識だけでも日本という国に好意を持ってないのはわかる気もする。

◇石橋湛山の小日本主義について

さて、日本と韓国の間には永い歴史のなかで、明らかにこちらに非があるのは秀吉による朝鮮侵攻だが、それに劣らず多くの恨みを遺したのは、韓国に對する武力による併合であろう。

日本では大逆事件の摘発の影響もあって、併合について公然と非をとなえた人たちは少なかったといわれる。だが、日露戦争のあと、政、軍、官が

急速に軍国主義に傾斜したこのとき、的確に醒めた目で現状を分析し、日本が本来あるべき姿を説いた人物がいた。当時「東洋経済新報」の若手記者であり、のちに第二次大戦後に鳩山一郎のあとを受けて第五五代内閣総理大臣となった石橋湛山である。

湛山は仏門に生まれ、明治四〇年、早稲田大学哲学科を首席で卒業し東洋経済新報社に入社、大正元年(一九一二)以後、戦前戦後にわたって硬質の自由主義者として健筆をふるった。

彼は、とくに同社の雑誌「東洋時論」において明治四三年の日本による韓国併合を一貫して批判している。彼は明治時代の最大特色を帝国主義的發展と断じ、「陸海軍は拡張し、台湾も樺太も朝鮮も版図となった。しかし国民は軍事費の圧迫に青息吐息である。」と述べ、あえて「満州放棄論」を説いた。そして日本の将来のヴィジョンについて、民主主義を推進し明治期以降やむを得ず採らしめた帝国主義を克服す

ること、つまり植民地を放棄し近隣諸国との善隣友好を国是とすること、すなわち「小日本主義」を強調している。

湛山はまた大正八年三月一日の、朝鮮全土における対日蜂起、独立運動についても理解を示し、「東洋経済新報」の同年五月一五日付社説「鮮人暴動に對する理解」のなかで、「いかなる民族といえども、他民族の属国たることを愉快とする如き事實は古来ほとんどない。…ゆえに鮮人は結局その独立を回復するまで、我が統治に對して反抗を継続するは勿論、…その反抗はいよいよ強烈を加うるに相違ない。」また「聞くところによれば(朝鮮)合併以来幾年にならぬ今日、朝鮮の富は既にほとんど邦人に壟断され、いわゆる事業は挙げて邦人の手中に帰せる有様らしい。」と書いた。さて紙数は尽きた。右の湛山の論説の五日後の、柳宗悦による読売新聞掲載の論稿「朝鮮人を想う」をはじめ、柳や、浅川伯教、巧たちの韓国に對する思いについては次号に譲りたい。

ピラウトル

三浦 正宏

今年六月二十九日から三日間、北海道日高の平取町で日本民藝夏期学校平取会場が開かれた。平取は「びらとり」と読む。アイヌ語のピラ・ウトル（崖・の間）に由来の地名だ。

北海道にアイヌ語の地名があるのはなぜか。北海道の先住民はアイヌ民族である。アイヌの人たちは自分たちの言葉で自分たちの土地に名前を付けて暮らしていた。後に移り住んだ和人もアイヌの人たちが名付けたアイヌ語の地名をそのまま使い、現在も使いつづけているからである。

北東北にもアイヌ語に由来する地名がある。ここにアイヌ語の地名があるのはなぜか。北東北にもアイヌ語を使う先住民がいたからである。蝦夷と呼ばれた古代東北の民族である。

和人と呼ばれたわたしたちの祖先

が、西日本から東北地方に進出をはじめたのは七百年前とも千年前ともいわれる。和人の進出は、はじめは河口の平坦地に集中し、新しくつくられた和入地には地名も新しい和名が生まれたであろう。しかし山間地への進出はそれほどには進まず、和人と先住民が友好的ではないにしても共存する土地もあり、ここでは地名も昔のままのアイヌ語地名が使われて残ったのである。

秋田県では雄物川の川筋にアイヌ語地名が濃密に残っている。

秋田市から雄物川を遡ると、旧雄和町の銅屋という集落に入る。銅屋は内沼という大きな沼に接している。銅屋はアイヌ語でトウ・ヤ（湖・の岸）の意味であろう。田沢湖町にも銅屋という地区があり、やはり湖に接している。北海道釧路の遠矢や虻田郡の洞爺も、アイヌ語のトウ・ヤ（湖・の岸）に由来する。観光地として人気の洞爺湖は、岸の地名が湖まで及んだ例である。

アイヌ語は文字を持たない発音だけ

の言語だから、和人はアイヌ語の音に当て字をして使った。トウヤというアイヌ語の音には、秋田人は銅屋の字を当て、北海道人は遠矢や洞爺の字を当てたのである。

雄物川をさらに遡ると、銅屋の次は平尾鳥に入る。「ひらおとり」もアイヌ語でピラ・ウトル（崖・の間）の意味で、雄物川に注ぎいれる平尾鳥川が兩岸の崖の間を流れているようすを呼んだ地名であろう。

北海道日高の平取も二筋の川が並行して断崖の間を流れ出て沙流川に注ぎいれる場所である。平取の風景は平尾鳥とは比較のしようもなく広大だが、崖の間を流れる川のようにすは平取も平尾鳥もよく似ている。

アイヌ語の地名はそのほとんどが山や川のように、あるいは自然現象を名付けたものである。金田一京助は「アイヌ語地名にうそはない」と書いている。

（秋田県民藝協会会員）

たくみ歳時記

三春張子の人形とお面

三春出身で郷土玩具研究の泰斗でもあつた橋元四郎平(元最高裁判事)によれば、江戸時代中期から張子人形、張子面、羽子板、木駒などが作られ、製法の多様さ、品の種類の多さにおいてほかに類をみないといえます。

とくに張子人形は上手な作りで、観賞用として悦ばれました。日本民藝館



三春張子 福助



三春張子 影政

や仙台の芹沢銈介美術工芸館蒐集の名品はよく知られています。

今回紹介の作は、江戸時代から続く高柴デコ屋敷大黒屋橋本さんの作。古作の復元や新作の試みなど、いずれも定評があり、また最近、張子面の制作では日本の郷土玩具でも屈指の出来栄を見せています。

また来年の干支の「張子の巳」もおすすめです。(S)

あとがき

近年、世界の経済的交流が急速に進むなかで、かえって宗教や歴史的な価値観、文化などの相違や拡大主義から、争いや誤解が広がる傾向がみえる。日本と韓国、中国との島嶼をめぐる争いもその一つである。

アジアはそれら三国だけでなくフィリピン、インドネシア周辺はじめ島々が多く、古代から王、サルタン、領主、酋長など、大小に応じていたていは地元で長がいたものである。だからいまになって昔から日、中、韓の版図だ、などといわれても困るのである。

ましてゴマンとある無人島の帰属の歴史的な証拠を立証することは、不可能に近い。これを自国のみの利に供しようとする行為は私欲というしかない。(S)

発行

株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一二
発行責任者 志賀直邦

電話

〇三―三五七―二〇一七

FAX

〇三―三五七―二一六九

振替

〇〇―一〇一―二三五六五九

定価

六〇円(税込)